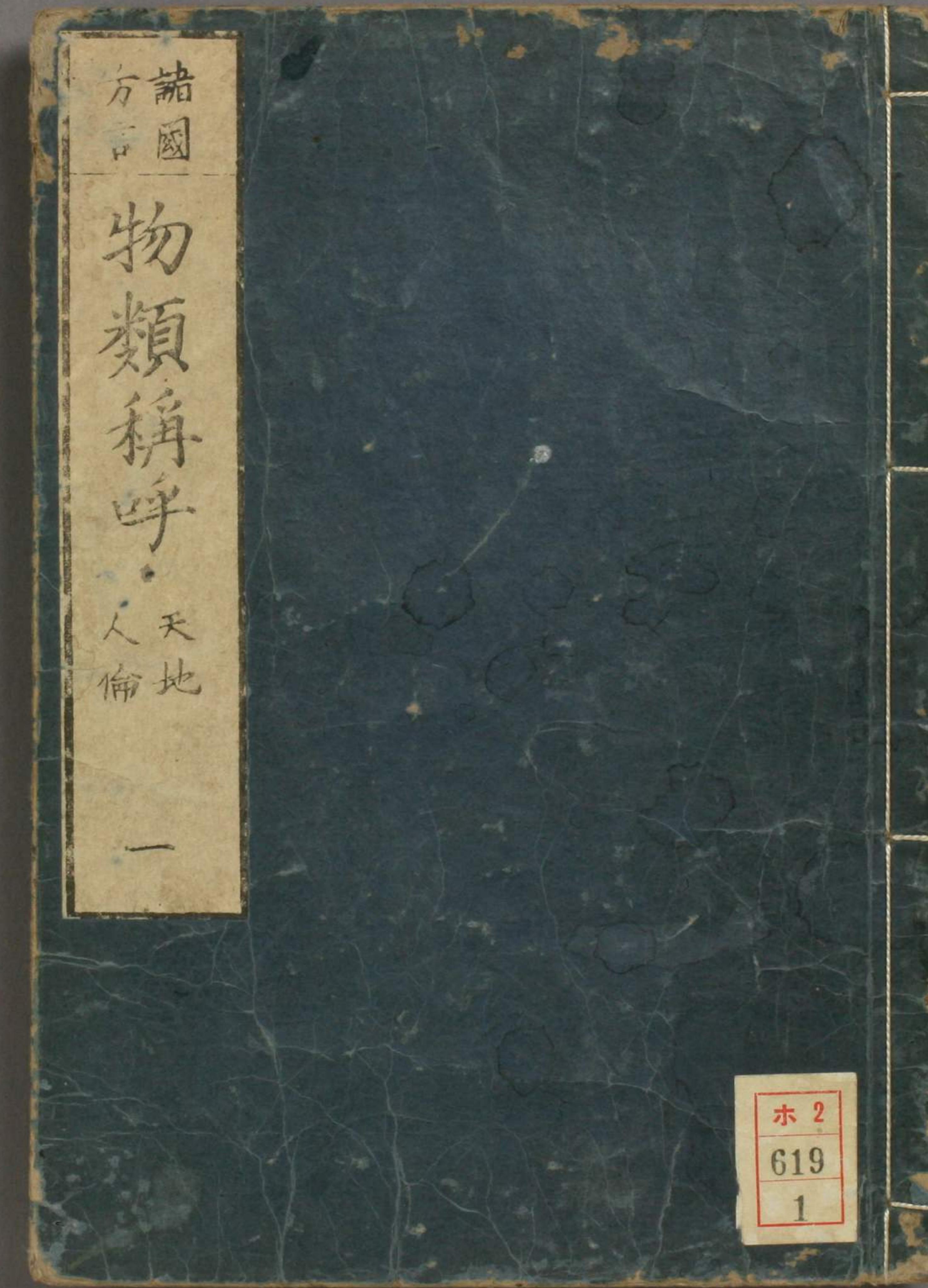


Kodak
LICENSED PRODUCT

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000

Centimetres



本加2
619
卷1

物類称呼序

古事記本

明治
大正

二條のかゞの筑波集ニ章の名もかゞよりてかゞなりと
りは句々假名は跡なるとの事もいせの淡翁と附へ
やとはさうに諸國の方言乃物ひりけふと名のねく
やうあぐひと称す選ひく三の巻とひらすとしもく
いがくをたる半島ふとそのりやも波くうつて小
からて本語をあひきよせえ多うも南へやも都會
人ねハ萬國の言語つゝもととのづく訛をくぎあうハ

卷之三

さきもし非の筆内を俗訛あふが東のを國かも
雅々うて是非志ざるよりよしら正音をゆゑむハ
花落小ゑびとぞちくわゆる其言の
落角セハ小あたゞ拘ひればもあらずとも他鄉セキヤウ
の思シテ戻戸シタマツを出シテて略事スル物モノ小異名ミナニりふゆ中シテと
ゆきさへ免シテて遠方アリを身ヒト小取シテ反ハラフの詞シメを變シテばも
の罪ミツをまぬシテんシテあめに編シテて物類モノ締シテ候シテよ

あふれ漢書の音語に泥まつて却て上古の書かと志すがひり
を鄙のへ一物一物の方語にて且てにそろへ被れか
さきども災事溥朴ふ庶へてまことと古代のままでをじ
なむべ大凡か 勅六十餘州のうちも山林と丘陵又草原
と尾張三河の國は倭いとぬのがはくの果また人多
直音引て平韻たゞか小言は佐藤東洋にひりてハ
常陸をよし奥羽の國とまで抑音引て上声多きハ
是凡土水争のあくまでもれず水があよりらるる縣縣も

安永し未孟春日

江都日本橋室坊越谷吉山識



物類稱呼凡例

一 ひ書あつて五冊とす。天地、人倫、艸木、氣形、署用、衣食、言語等、絶七門よわ列ハ簡易にして、探し求めやどれを要とす。それが中に天地と言語と、答用を主の如きす文へ出をもみ有りとす。術、淡巷院を聞ふにちよかへて、あは、侍せば、爰見不堪の誤多うしものと、又其國を、教説もと、は國中九の義にあひて、一國ハ勿論、一色のうちにて、も品物の名興るをみゆに縁むる事あらず。

一 諸島の和訓ハ源順、和名鈔及漢語抄 李朝印行の諸家李叫等に譲りて、審小誌さず。是ハ識者のために非とす。童蒙に便せんと、故より事物の悉くかよやどれのえ代載てあると、又而く註釋をくわす。

一引唐宋の書の目より□をひよもて是をわらひ又方言の讀はよハ一をひよてかうじあとバ花鳥風月引あうかう引如此の類ひあう余是に准ぞ

一諸國とりに中品以下の人人物ハ言語あやまちひ者多自然と和合して能通用を故ニ爰に洩れ事多一此編小著と云ハル民俗要用の事のと致すも廣大なる國郡無處の言語以てをもの歳月をもとと大成する事難し跡更經考どももくがくびをもくハ蟲海の説をあくんか

物類稱呼卷一

物類稱呼卷一

天地

江都 越谷吾山秀真 編輯

やくえ小極と称すもとあれ○上總主と。ひづのや又歎のひと称せ

ほくと東北と称すもとあれ○東園主と。七曜のや又七曜のひと称せ

ごう二十八宿のゆゑ○東主と。九星の星と云ひてそば。もく星と云

と云

參

昴

北斗

辰

風

と手を藏の國葛もそのまゝや」と云

かぜ○表内及中國の取人のまことにあ小の風を。わがせと称。二月の
風を。と。小より。前月の風を。風が。どちらと。四月。まの方。う。風
。いづら。まよ。と。八月の風を。あく。と。八月。まの風を。きらま
と。よ。風。や。の。風。と。去。風。あ。と。よ。七月。ま。の。風。と。ち。う。ま。と。月。の
風。を。う。と。よ。九月。の。風。と。よ。ま。の。風。と。よ。十月。の。風。と。や。よ。八。ま。ら
よ。十月。十。育。の。ひ。空。風。と。た。れ。と。よ。○。和。國。ま。と。わ。風。と。よ。ま。ま。ま。ま。
の。風。成。と。あ。や。と。よ。○。よ。ま。と。ハ。東。風。と。あ。の。風。と。よ。わ。の。風。と。う
あ。け。と。と。少。と。ひ。あ。わ。と。と。東。小。の。風。と。じ。あ。ゆ。と。と。せ。の。方。う
ゆ。ゆ。ゆ。と。あ。ゆ。と。と。東。小。の。風。と。な。ら。い。と。と。ふ。あ。い。と。と。お。ゆ。の。風。と。も。が。う。と
云。も。と。ト。絶。だ。と。と。よ。ま。申。の。方。う。ゆ。ゆ。風。と。風。士。も。と。と。○。便。筋。

まち前或ハ伊豆の船泊三月十日未後一七日がどひもやうらへ吹く
風と。林さん和風さう但年無歌二月七日未申テ一かうあ風也。あ
らまどどの肩よりまほせあ風也。ちがせまほ肩極めに入りあ風
を。うちをまほ袖向風に吹風也。あくまへとまほ袖向吹風也。ま
まほ風もまほ肩もまほ少すの爲一七日未申年也。一さくと云六月去
キこ故にたまほとまほ六月や旬をまほ秋年也。がんごらと云えどか
あゆく。これまたどほ八月の風也。あそぎと云えどもくれてやるゆく。ま
まほ風也。ともと十月やかくやくわ東の風と。星の火と、船の火と、
又大風まほ二月吹き。奥よせと云六月の音より罕ハ取二月東南の風也と。
まほ林げやまほ二月吹東もの風也。そばと云八月吹ゆ也。那
まほと云四月の音より二百十日十月の音十月和風也。神風と云。第三月の音と云ハサウ
エ○を海潮水と云のまらぬ事と。海天と云はれどもと云

物類稱呼

湖の水を。根を。木を。云秋冬の風を。日あべと。春夏の風を。やま
せんえ。るがせぬ。せん風などと。撫摩ガ又國まで去南風まで風と
ほと風と。やうどと。○放逐もあらす。だつてふふの風と。ちも
うとふやもの風と。ひことよふ

今接よ和小の風を。ほばけそらを。どうふわや。の將作後拾遺小

「あか。吹拂。の音。字。船。出。て。あく。そ。ま」と
と称す。上風を。ハ。と称す。ちと称す。風。が。こ。ら。も。あ。ら。ふ。と。
是や。又。神社の櫛。ま。千木。う。ね。も。凡木。と。書。し。尚。従。あ。う。又。二。日。や
ゆ。と。鬼。北。と。六。五。寅。の。ろ。う。吹。く。と。つ。下。べ。丑。寅。の。方。と。鬼。門。こ。つ。で
り。も。又。あ。づ。ま。ゼ。ハ。あ。づ。ま。ド。の。精。徳。う。わ。か。ド。と。と。か。ざ。く。る。や。又。之。

ハ。薰。風。也。呂氏春秋。東。南。風。を。云。有。車文續集。夏。風。セ。ミ。テ。ノ。モ。

同。能。傍。ニ。草。マ。匂。化。モ。ア。レ。ナ。又。星。の。入。ジ。ら。ミ。ミ。想。ブ。テ。背。

書。の。あ。う。正。月。の。序。中。ハ。も。ゆ。る。星。の。變。す。日。わ。か。な。と。空。と。地。と。海。と。常に。八。月
日の。變。す。と。く。の。變。す。れ。全。月。よ。ひ。あ。う。そ。孫。す。も。一。秋。九。月。よ。ハ
か。變。く。も。む。る。事。あ。う。是。と。九。月。の。ヘ。ぞ。子。出。月。の。出。す。と。船。の。よ。す。
い。事。と。又。俗。よ。も。小。風。よ。も。あ。う。も。東。八。宣。摩。の。氣。風。と。之。ふ。清。風。又
同。月。如。春。翁。に。秋。ふ。り。つ。も。东。風。も。て。る。津。ら。と。う。れ。よ。う。信。奇。も。あ。う
ま。南。く。に。か。わ。て。方。角。の。か。く。あ。る。大。元。冥。毛。ハ。あ。る。れ。則。南。摩。东。風
モ。則。晴。る。と。之。と。室。东。に。ハ。和。風。と。晴。れ。あ。れ。と。南。摩。東。風
谷。風。以。陰。以。雨。と。有。谷。風。則。東。風。と。あ。れ。ハ。異。國。と。も。東。風。と。而
降。ると。刀。と。た。と。又。東。風。と。て。と。と。云。鳥。家。鄉。の。哥。に

夫。木。へ。浪。う。じ。仲。の。あ。と。や。つ。と。から。ー。生。田。ふ。と。と。と。物。み
舊。車。紀。疾。風。と。之。是。也。又。八。月。の。風。代。暴。風。と。之。連。肺。と。と。肺。が。と。微
陸。奥。そ。鮭。下。風。ヒ。よ。び。ひ。う。鮭。の。魚。と。捕。と。つ。ト

百丈雲

牛參釋

ちのくも○江戸モ。坂東左郎と云坂東太郎とひよ大坂モ。丹波太郎と云
播磨モ。三河ぐもとひよ九郎モ。比古太郎と云比古山ハ五箇の夫。近江及
越前モ。信濃太郎と云か留モ。いとちどきとふ安房モ。琴をと云
今案にれちの異名夏雪のあの方角をゆてりひ又まれよりうてぢづく
夫本
みを月にちづめと夕之のかほそとわやひ事のせのまゝれ

古文前集 四時詩云春水滿四澤夏雲多奇峯此謂之四時
之詠一物也

小ド○東國の小火○乃ドと云尾張のお人錫づらとゆふもそ。リドと云
萬葉 ゆド 又のすともゆア 和ふこそひつドと云ハ
タ虹の略経

丹鉛錄

雨則有白雲或冠峯岩或亘中領俗謂之山帶不出三百必雨云又唐詩風吹山帶遙知雨氣也此又不時に村家の暦とおなじ霜根山

も。ま、う。あとく。

ゆき○東武にて。綿帽子もとつとあまもおいたひやうと、御用
もじゆくふく雪と云越境にて。がく雪といふ也。がく人雪ともい

あやも○美和子。あやも
いもくあれの形と
どくとまほとまほ。水落とし

はくとたひ○越後をかかびと云奥のほりも。おゆきの向南邦

また。墜氷と云ひ。化鳥也。たりひと云ふ。今津及信乃も。そも。ごやうと
ひそ。和爾及近に。ひそて。かぶらと云ふ。鳥也。そも。そも。うち。ゆく。とつふや。ゆも。ぼ
うが。ねと云。伊勢白子。も。かが。ど云。御殿上。も。ぼんぢらと云。水柱。島冰の
ほんぢら。足利尊氏。
にて。○山陰通及相模八箱根小田原を。そも。ちとと云。源通村郷の。ゆよ
「えどひまくぬすに。越ゆるため。うづばも。しきやぬまた」

東

勿貞角乎一

水

さかべ○上底カタシマを底シマ小見の匂ミソまんぬと云蕩ハラカてそ。あくとうアカルトウアカルハ水
の梵ハヌ傳ツル傳ツル舟ボウそひ流リュウすにあくとよ

泥

そろ○備ハセ後ヒロ補ヒツす。たべんとま 金泥キンニ銀泥ギンニ壁カニす。水もばる
金カネ一可後ヒロ勘ハシナスハシナ二又ハシナ三ひだハシナと云ハシナ沙サド

水口

さかうち○苗代ヒラいと底シマす。水口と稱スル 按スルに苗代ヒラハよ古田地カタヒラを代ハシナりて今ハシナら
と呼東ヒラまで。水口と稱スル き接スルに苗代ヒラハよ古田地カタヒラを代ハシナりて今ハシナら
あうとくと云事ハシナも又名ハシナを代ハシナりて今ハシナらもい

そろひとよ

原

たら○疏ハラカもて。まるとゆ 伍ハシナのちうひのる
ごと○上底及信鷹ヒツヤウす。まるとゆ トモトモ土堤

土堤

かげ○範ハシナもて。ちさとよ

谷

たに○莫ハシナす。たみと称スル 黑岩カクイ新谷シンガ 相名ハシナ信食及上底シマす。やつ

岩窟

と呼ハシナ窟カタマリ谷カタマリ。空ハシナ無ハシナす。やと鳴ハシナ 渋谷シバヤ 滑器ハラカ

穴

いのハシナ○猿ハシナ食及上底シマす。やぐらと呼ハシナ

四會

わふ○東園ヒラそ。めどハシナ云 東雅ヒラ曰孔窓カクマリと呼ハシナてゆハシナどと云ハシナあめど又

小路

紛ハシナてハシナ云計ハシナの穴ハシナとづハシナからハシナもや

越後

よくド○東及津浦ヒラモ。十文字トモ字ハシナ 説文ハシナ云信名ヒツヤウモ 四方カタハシナの辻ハシナニ

越後ハシナモ。西ハシナはとよ同ハシナ長ハシナ是ハシナ。北ハシナはとよ南ハシナ。四ハシナ岐ハシナとよ

閨房

かうぢ○京都ヒラそ。櫛ハシナと云ハシナ。櫛ハシナと云ハシナ也ハシナ。

河岸

松坂ハシナそ。小河ハシナと云ハシナ。勢州ヒラ山國ヒラモ世ハシナ古ハシナと云ハシナ

○辻子ハシナ京ヒラそ。一ハシナとよ 本町ハシナ河岸ハシナ或ハシナ浜町ハシナ 大坂ハシナそ。大坂ハシナ及ハシナ伊勢ハシナ又ハシナは小河ハシナと呼ハシナ 岩ハシナ大坂ハシナ及ハシナ伊勢ハシナ

かー○江戸ハシナそ。一ハシナとよ がくハシナ京ヒラそ。大坂ハシナそ。大坂ハシナ及ハシナ伊勢ハシナ又ハシナは小河ハシナと呼ハシナ 岩ハシナ大坂ハシナ及ハシナ伊勢ハシナ

京ヒラそ。川ハシナとよ

跡ハシナ○遠ハシナるそ。やそぞうハシナよかハシナるて。こざとりハシナよがハシナそ。をこハシナとよ

昆

いさ○寳而そ。をざれとよ越後そ。がざとよあすを尾とひとゑ
小きとがさとしふひそてハ商家の慶戻と
よすとがくと見に尾出とすと

地震

日本天智天皇紀 是春地震とす

石

い○夫國そ。ごくと云ハ右の少う相と云東國そ。至りと云
山陰なそハくと云細小る越中そ。いーかよりふにテと云。ぢやうと云
ひ○サクナホリそ。て。のと。よ日陰を。て。くと。ふ。あもモ。林陰を。
の暗はる。ス。お。お。の。身。に。こ。ま。よ。く。も。す。ま。つ。れ。ち。お。え。や。秋の秋の月
と。ゆ。き。り。ハ。撒。夷。人の。術。よ。胡。砂。吹。と。事。の。き。り。や。
から。れ。ば。さ。○。生。ま。車。そ。か。ま。ア。づ。き。と。り。ふ。と。ハ。松。マ。ヒ。と。ア。お。と。大。社。神
と。ね。モ。

晩

つでも。○阿波の國そ。こすりと。よ。東。は。海。そ。ハ。土。月。小。月。れ。ハ。翌。朝。是
入。終。晩。日。と。正。月。二。日。と。元。日。と。月。を。は。海。の。松。大。ど。り。そ。

日南

ひ○。○。サクナホリ。そ。て。のと。よ。日。陰。を。て。く。と。ふ。あ。も。モ。林。陰。を。

禪臂

日本天智天皇紀 是春地震とす

店

人倫

父

ち○大和そ。あんの。と称。と播磨。そ。を。和。國。そ。。て。ち。と。云
長崎そ。ち。や。ん。と。云。肥前。佐。賀。そ。。別。島。と。云。越。あ。そ。。の。と。い。父
と。て。と。称。と。と。呼。ハ。諸。國。の。通。称。ハ。萬葉。及。宇治拾遺等。にて。と

釋文

足。と。と。書。侍。と。あ。れ。と。と。ひ。ど。と。ソ。父。の。將
所。か。と。あ。り。又。上。総。そ。祖。母。と。崇。め。て。の。と。称。一。越。前。そ。父。と。の。と。呼
松老の。判。髮。や。一。など。と。の。と。ひ。ど。と。ソ。父。の。將
所。か。と。あ。り。又。上。総。そ。祖。母。と。崇。め。て。の。と。称。一。越。前。そ。父。と。の。と。呼

キ。代

ち○高麗そ。かくと。云。吾。孫。そ。の。わ。い。と。云。阿。妣。か。と。一。祀。の。祭。

そ。の。ひ。り。う。か。う。云。同。母。と。り。の。翁。そ。つ。だ。と。よ。

山崎垂加翁云俗人の母と称して婆との胎のまによ難と云又母と
ソハカリソハ諸國の通称歟もて兒童ハハワサンと年ひ年長してモ
母者人と移とあるそハカシムトヨ袖中抄ホウウまくらのちくあはせ
アラセシハシロノ註トハキタマシナムの事とちくあはせト婆の者の
妻也とハ年ハ是よりヤハ歟又はと多角轉てかとびりか歟又
トソヒ母と云ふハシマラムを通称としてこれを號リ。洞も玉くまも
だらけれ也のとてに得を以下準

わに嫡子セ俗ニ越後モ。あんあやと云東國モ。セシナヒシ物モ
。而ニ引トツ更あ那モ。あふといナヌモ。トガリヒシ物モ
。親シヒシお佑モ。かやハシヒシ。西川氏云ガリ
ミ云ハ破茅ハスカリベマシ或書の序に茅の始て草に生リル物と破茅と
サシタケシヤ。云吉山熟事に破茅の尼も可なり。どうハあれどぞば

兄

妹

妻夫

梅明の略ハナシはん後梅公の足もつハシの明と云意アリベー又回足を
セとひ手とハセとひす日本紀又手モ又妹背ハシマヒ妹と背あ
事ナリトテ東手モセモヒモ古代のきゆがるべ
あ称○九召モセ○ぞがうぢと云上唇脣鼻モなとふアキナニ限目上のやをも
人てりと
キト○薦摩モセ○あ丈丈男夫子セイジト
つま○あよて他の妻を。ふ肉ハラと云ふ大坂モ。ふ忍ハシムと云ふ
治尺モ。かくよよと云甲燭カクヨウモ。中居ハラと云甲燭の下の事に用ひ甲燭カクヨウニ
と云ふ中居燭摩カクヨウマ又越後カクヨウに云甲燭の下の事に用ひ燭摩カクヨウマの東州
あね又ハは御モ。あつもとづ若が母と云ふ物也小兒の母ハシマてりあは。仙臺センテイモ。むかと
とのえでよよと呼ハナシト云。脚ハシと云。脚ハシの通称ハシと脚ハシと
うかとて高ハシマ也又骨董モハ憲帰カニキと呼て。をむさとと云上唇モテ。

牛參科

めことりふ。源氏　_{スメコノキモアミ}で他の妻とを。むぢよと云
ともこれハ多まく。ト賤の妻と尾瀬もそ。ちやかとくぶ、江戸も
りふと。かこさまとくぶ、翁女の妹と對馬もそ。をゆことりふ、佐渡もそ。
をもゆ即とりふ。おともとハ、おののりとくふ、ちとくふ又とくふとひせ居内シテ
すとくふの通称すてだよ、とまわらび

をちご○東まで。いと往々
や。とくぶ信の上り。あくとく。因かまそ。び、とく
あほ。信良も。越後も。やつと
こう。因かまそ。いと云。東國も。わづら
く。とひ又が。とくふ童わづら。又派子智
く。往々。き男と。今も。寄り。そのさまとく。因かまそ。いと
よ。よて。とくふ。既に。義も。て。ごといふ。

わけとなりて御轉てわことよ 吉語拾遺 男児とワニとよみからを佑る若
子の名前用るハ止ま是弱の字を用ひキ半ばれども家又廢てよし
と之を廃してあの字を備身りしといふ 萬葉 がアノのまのてこそ
と呼す、かの名うて多くのまとてじとひめバハジの女と(主事)がまえ
やあね

すとめ○あまそつざわらんともは達摩もすものに引くや中國及
東也そ。お引とよのあい更の角歌もと。おもとよ越後、高麗も
もそ。をあんとよ、他の妻女をえり備前守もをか
めのと併へる○青田の東はひいとみはの小火うちの屋根
を又疎めそ。またとよおき細みて源氏
南宿別志云あこと、うぞのゆえ
と脣圍一言もつてああこぢりも嘗ての城じりとすゑが乳母にうまきも
よしむと、うもとよと又

息女

乳母

ううや魚にうむゆく樹たわこがれすもつづく

菅原のいとれあひ財よりまよひしよへりま今葉に但来前の夜は

うかとれども小児をめことなりにや日幸記すとく（職人歌）

同核巣の細はあやうふもそくとも是ハ小児とてらことひ一
すすきもと今も东國の事すてることひもあきてわらひむれき
通もと同ことならえ又須兒とすがれきとひて小児までハあべ

俊頼朝臣の哥に

「山羊ハとしが竹燈とひやま萩をうへこさすに」

やもめ（俗ニ後家又後室）○あそくやまあとま尾ひすてやじめといふ

てかくよをひそへつぐめとう

おりいよの○京師とてかけとくぶ東國ものけとみ西國及尾
ひそひと云津地や東あひとモ。かのとよ

寡

遊女

うれめ○美内そと。おまえ夕のせと云ゆ是そハ。女郎とよ。おまえ
お八戻場伊勢、前まそ。數女とよ。内玉をもぬそ。ちてどぞと云ゆは
お人の近のまそ。とよ。おとよ。翁翁林そ。のゆもらとよ。更衣そ。
福田まそ。とよ。他女のあせとよ。おのほれども。奥州松前そ。やんとよ
。とよ。やうくとよ。他女のあせとよ。おのほれども。奥州松前そ。やんとよ
。越前敦贺そ。ひひやうと云ゆは。又越前越後の海辺小宿を云
わき是ハ旅高人はよ。追前の内をすまうけて支ぬあくばを宿方宿を云

「海より岸より水や寒一まほえ宿。そぞ

今按小傾城の名ハ李延年う詩の意をうて傳俗遊女の称とがる
和漢をあひ名玉車久一詩漢育游女。東鑑清水冠者と遊
女の別名とせられ事と載る。又やゑの異名を一の渭。うれめ
うれめ。うれめ。海士のす。たうれめ。ひととまあ。翁也。喜也。海セ
地名ハ多島のゆくのす。ちのま。お島の里。近ひのかた。ふ。野宿。小舟のす。

拾遺集

「中へつひはあらそくのやうやうのねのけりやう」 源頼光
かみの河のくびゆかうよりみがくまく古ハ軍營へりぬをさへ
更も奴者侍軍士無妻者とうてゆふ奴ハナよまざれうち奴とアキミテ奴
仕主ち故に奴のまの上に十室を家て奴まとももまくら又た柳
入の室と呼て大畫とよと太神みなもくてもす神樂の絃笛をつけ
トウカア社舞はせば拂持ヒヤル 箫の音よ神がくらぶ輕人妓有と翁
もさめいきのとづき、牛もて牛ハ鼻もつづく又ぎく、衣もつもく
翁のものスハ想わをたとえぞおき、ふとつまもあらん、既忘ハ

一
二

金華集

物頤角乎

「ちともぞく肩臺の下へてやまも老よりまく
老女とひきへ
福本
ほのあともうびきもまたわがむねがくらむる
うかみのそらをうへしとえれへ梶原坐の向は
あらうすかと玉置に畠モ○傀儡の免膳玉置と申ゆまく

の紅茶まで今世人重ふとあつて精良となり候
又後醍醐天皇も波鬼界の御名

萬葉万葉 八多葉良と書
和名

和名 瓢飼馬篠龍也。又西國及

1

卷之三

十三歳の誕生日あやうい事ぢくとも
和名

春秋庄氏傳 昭八年有仍氏女鬢黑而光可以鑑名曰玄妻

用也。喪を立候ひうと云ふ事もあれ。喪の際の數うは浅く高きの
名をかきや又がいが祭揚昇くまへきひうて長高きものから故あく
立つて候。

○酒製ると同じるものとシードと云ひ一役よりへ差し即とらるの
よく酒とほくが是とうべく後にもあると云ふ一役は頭兒ときそ
ほのかられことよの儀ひうと又吳國そハ杜康と云ばざるもこれ
杜氏かうと云候。東雅_二む一酒造司は大刀自小刀自次刀自とて云うの
酒造_三盡_{アキ}をもとと自自酒をもとへ一扣後_{アキ}酒づく人をも刀自と
云うへきひつぎ一言をたる。彼酒造司の刀自ハ三條院の脚跡_{アキ}
云々と有_{アキ}て自うちてきとあるもよにあすと云々是の事
の如きも世え異聞のことと附會_{アキ}して云候あうと刀自たとを
○酒糧_{アキ}を事あそ。なま多_{アキ}い又どうぞひうふ大坂_{アキ}。と云ふがと

奴

師陰陽

梓巫

氏子

盜賊

○遠近_{アキ}。泥_{アキ}と云_{アキ}。碎_{アキ}て泥_{アキ}のや_{アキ}。唐
津_{アキ}そ。そん_{アキ}と云_{アキ}。

夫_{アキ}一俗_{アキ}云_{アキ}。○上源_{アキ}そしけ_{アキ}。おとこ_{アキ}越後_{アキ}そ。かど_{アキ}と_{アキ}の傳_{アキ}を
そにとく_{アキ}。でに_{アキ}東_{アキ}云_{アキ}。京_{アキ}そ。久_{アキ}。久_{アキ}と_{アキ}の傳_{アキ}を

そん_{アキ}と_{アキ}。そん_{アキ}と_{アキ}。○備_{アキ}そそつかん。くらと_{アキ}。そ_{アキ}そ_{アキ}中_{アキ}に
みちひと_{アキ}て_{アキ}と_{アキ}。○備_{アキ}そそつかん。くらと_{アキ}。そ_{アキ}そ_{アキ}中_{アキ}に
みちひと_{アキ}て_{アキ}と_{アキ}。あすそ。あすり_{アキ}と_{アキ}。昌門_{アキ}の門_{アキ}うて今_{アキ}おと_{アキ}
うと_{アキ}。近衛龍山公_{アキ}の

後漢書出_{アキ}。既及_{アキ}上原_{アキ}下原_{アキ}そ。せき_{アキ}と_{アキ}。

〇

〇

方言卷之二

乞人

内とぞされしよとぞたまらそく、かのじにせうそも
○須利東國そよもくにぬまひよの続
シモヌ三重全保義
そ。さがとす。持多て。ひるとびとよ。そんひへ萬^{まよ}とよとよと
○かと東海を舟まこと。のととよ里を船の道^ようと云
南をよ。よろくと

法華經。清淨乞食文。**長沙王**。乞食跋陀行。乞食文。

山を出でて又奥へ入る。越後越中界にて。やがて山の
奥を副る僧なりと有又姫は事も。どうもよひまことからざりともの病痛
今うち戸みてよ疏をうとうものと色いたらし工房にて。匂ひ引かん
乞食を下す。勤らしくとよ犯唐は又に薄齊自室也。せんじんとよ承
きそ。もんぢとひ又ひぞくとよ大坂も。垣外とよ

と按て悲田寺へ京坂町内河の邊に坐拾芥抄云聖武天皇施藥悲田
の三奇と建て施藥院ひやくいん人の病と療り悲田寺へ小兒及乞食の病致
治ち及後廢のち乞食の寓よトアマコトヒシカウテ那病人の親族控
ラシキモの般若坂はんにゃざかに集まつト徳宗とくしゆうの人不惣ふそトアマコト
聚あつニ悲田所ひやくじょト立たトクシテ御ごの宗源そうげんの門限もんげんハ而ひて在あリテや
又聖德太子悲田院ひやくいんと建て郭内くわい小居すみヒ魁首けいしゅを長吏ながりとて郭外くわいのものと
非人ひじんとて故に今も东園ひがいんと呼よて長吏ながりとて郭外くわいのものと
從つに病びやく病人びやくじんをかつて之の悲田院ひやくいんと書かて悲田院ひやくいんうち起おきらむ者ものとて
是これハ樂院らくいん也や證治要訣じょうじようせつ害いた大だいとと又害いた大だい物ものの
乞食こじきハ乞食こじきののもと別べつ處しよを有あくれ土佐日記とさにちき伊勢物語いせものがたり等ともも又また
又榜號ぼうごう望のぞののもと傳つたえてかづいたる者ものとて御ごの爲ために
其そのども又また乞食こじきののもと傳つたえてかづいたる者ものとて御ごの爲ために

物類稱門

たのむ事も出来ぬ

屠兒
和名○近ひそ。かどり。傳來そ。かと云。既に死。人和と云。東
國も。からんと云。上原下原も。からかくと云。難波も。ざくと云。同也。も
是も。がくと云。難波也。かくと云。草坊也

眉
まゆ○寝ゆそ。まやげそを幽ゆそ。まうあいとゆめゆそ。うの
けとゆ考源及上原そ。やまとゆ

とひいもぐれともほてる。又あそびちらかどつて胸をあてぬとま
枕双子二腹黒とくわんこをあど。又おもて脚黒ハラタカとくわんこをうへがまをす。
三代実錄
寂相業ニヤシ相業ニヤシとまくま

宣和本草 卷之二
宜和本草 卷之二

ひざ○多々も。つゞきとよかみそへ。ひざのまゝりとよかみそ。ひざ
すゞきとよかみそ。ひざのまゝりとよかみそ。ひざのまゝりとよか
みそ○相手のまゝも。ごんばくを内後も。こうべとよかみそ。つべ

七

陰

へへつび○夷羽及越嶺又尾張のもの也。とす。冥西冥東をもに傳て
アハルのを傳るもあア上原千鶴子。そくとうば外男女の法を多く是名角。略をじくす。也
シテシテハヨリソレウトビタリ

肺

踝

跟

跟

こもる○東國まで。かく。だとす信濃ぞ。たゞ。かたと云中國ぞ。
ひふまことがとう。後漢。そと。底き。と。伊豫ぞ。かく。と云
うちぶーつゆ○毛髪。そと。うの。筋。とう。構。多。そ。つ。く。す。と。を
空。うち。ぬ。そと。ぬ。こ。と。河。そ。く。毛。ぬ。と。仙。都。そ。た。う。ば
と。云。上。脛。そ。うち。下。毛。こ。そ。そ。い。一。か。ご。よ。

物類稱呼卷之二

